中学校「体育理論」における「キー・コンピテンシー」

－中学校学習指導要領に着目して－

伊藤嘉人，玉腰和典，久我アレキサンデル，加納裕久，丸山真司

１．問題の所在と研究の目的
２．新しい能力概念としての DeSeCo キー・コンピテンシー
３．中学校学習指導要領における「体育理論」領域
４．DeSeCo キー・コンピテンシーから見る中学校学習指導要領「体育理論」
５．中学校「体育理論」におけるキー・コンピテンシーの研究課題

１．問題の所在と研究の目的

2008 年に改訂された中学校学習指導要領は，21 世紀の「知識基盤社会」を念頭におき，確かな学力，豊かな学力，健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことが重要視されている（文部科学省，2008）。この学習指導要領が「知識基盤社会」に対応する内容になった背景には，経済協力開発機構（Organisation for Economic Co-operationand Development 以下，OECD とする）の PISA 調査の結果が強く意識されている。この PISA 調査概念の枠組みの基本となっているのが DeSeCo[1)]（Definition and Selection of Competence）プロジェクトのキー・コンピテンシー概念である。キー・コンピテンシーは，知識や技能だけではなく人間の全体的な能力をコンピテンシーとして定義しており，表 1 に示されるように，今日キー・コンピテンシー概念をもとに教育目標を設定し，教育政策をデザインする動きが世界的に広がっている（国立教育政策研究所，2013）。我が国においても次期学習指導要領改訂の方向性として「世界的潮流として，OECD の『キー・コンピテンシー』をはじめ育成すべき資質・能力を明確にした上で，その育成に必要な教育の在り方を考える方向」であると明確に示されている（文部科学省，2014）。しかしながら，キー・コンピテンシーの掲げる諸価値はあまりにも多岐にわたり，そうした価値にもとづく要求がどのような実践として具体化されるのかはほとんど明らかにされていない（松下，2011）。

このような背景において，キー・コンピテンシーの視点から各教科の能力を検討することは，教科の本質的な能力を問うこととつながり，教科のアカウンタビリティーを問う重要な研究課題であると言えよう。本研究の対象とする体育科は，身体活動を通して知識の重要性を認識すると

ともに，実技と知識の相互の関連を踏まえた授業が展開されることが求められ（佐藤，友添，2011）その中でも「体育理論[2)]」領域は，中学校・高等学校体育において各運動領域に共通する知識内容が位置づいている。このことから「体育理論」のキー・コンピテンシーを検討することは，体育科のキー・コンピテンシーを考えるうえで重要な研究課題となると考えられる。そこで本研究では，中学校体育科の「体育理論」領域に絞り，DeSeCo キー・コンピテンシーの視点から「体育理論」の学習内容を検討し，中学校体育における「体育理論」の研究課題を明らかにしたい。

<table>
<tr><th colspan="2">DeSeCo</th><th>EU</th><th>イギリス</th><th>オーストラリア</th><th>ニュージーランド</th><th>（アメリカほか）</th></tr>
<tr><th colspan="2">キーコンピテンシー</th><th>キーコンピテンシー</th><th>キースキルと思考スキル</th><th>汎用的能力</th><th>キーコンピテンシー</th><th>21世紀スキル</th></tr>
<tr><td rowspan="3">相互作用的道具活用力</td><td>言語、記号の活用</td><td>第1言語
外国語</td><td>コミュニケーション</td><td>リテラシー</td><td rowspan="3">言語・記号・テキストを使用する能力</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>知識や情報の活用</td><td>数学と科学技術のコンピテンス</td><td>数学の応用</td><td>ニューメラシー</td></tr>
<tr><td>技術の活用</td><td>デジタル・コンピテンス</td><td>情報テクノロジー</td><td>ICT技術</td><td>情報リテラシー
ICTリテラシー</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="5">反省性（考える力）
（協同する力）
（問題解決能力）</td><td rowspan="5">学び方の学習</td><td rowspan="5">思考スキル
（問題解決）
（協働する）</td><td rowspan="5">批判的・創造的思考力</td><td rowspan="5">思考力</td><td>創造とイノベーション</td></tr>
<tr><td>批判的思考と問題解決</td></tr>
<tr><td>学び方の学習</td></tr>
<tr><td>コミュニケーション</td></tr>
<tr><td>協働</td></tr>
<tr><td rowspan="3">自律的活動力</td><td>大きな展望</td><td rowspan="2">進取の精神と起業精神</td><td rowspan="6">問題解決
協働する</td><td rowspan="2">倫理的行動</td><td rowspan="2">自己管理力</td><td rowspan="2">キャリアと生活</td></tr>
<tr><td>人生設計と個人的プロジェクト</td></tr>
<tr><td>権利・利害・限界や要求の表明</td><td rowspan="4">社会的・市民的コンピテンシー
文化的気づきと表現</td><td rowspan="4">個人的・社会的能力
異文化間理解</td><td rowspan="4">他者との関わり
参加と貢献</td><td rowspan="2">個人的・社会的責任</td></tr>
<tr><td rowspan="3">異質的な集団での交流力</td><td>人間関係力</td></tr>
<tr><td>協働する力</td><td rowspan="2">シティズンシップ</td></tr>
<tr><td>問題解決力</td></tr>
</table>

表１　諸外国の教育改革における資質・能力目標（国立教育政策研究所，2013）

２．新しい能力概念としての DeSeCo キー・コンピテンシー

DeSeCo の能力概念は，国境を越えて共通のビジョンを構築し，その課題を実現するために，未来の社会の成員に教育を通じてどのような能力を獲得させるべきかという問いに答えようと世界的に影響を与えている（松下，2011）。図１に示されるように，DeSeCo キー・コンピテンシー概念は，「社会や個人にとって価値ある結果をもたらすこと。いろいろな状況の重要な課題への適応を助けること。特定の専門家だけでなく，すべての個人にとって重要であること」を前提とし，「相互作用的に道具を用いる」，「異質な集団で交流する」，「自律的に活動する」３つの広域カテゴリーとして分類されている。またキー・コンピテンシーの枠組みの中核には，「考える力（reflectiveness：個人による人生への思慮深いアプローチ，反省性）」が位置づいている。そして各コンピテンシーは，「考える力（reflectiveness）」を中心として，自律的に活動し，人間関係をつくり，そのために道具を活用して成果を生むと捉えられる（立田，2014）。この「考える力」は，個人がどのように考えるかということだけではなく，その思想，感情，社会的関係を含めながら，その経験をど

のように一般化するように構成するかということでもある。つまり，自分を社会的な抑圧から一定の距離を置くようにし，異なった視点をもち，自主的な判断をし，自分の行いに責任をとるようになることである（D・S.・ライチェン，R・H・サルガニク，2012)。

また，３つのコンピテンシーの「相互作用的に道具を用いる」「異質な集団で交流する」「自律的に行動する」は，各コンピテンシーを独立して形成するのではなく，３つの座標軸のような相互関連性をもち，能力の全体性を統合的に捉えられている（松下，2011)。そして，３つのコンピテンシーを統合的に関連させて学ぶために「考える力」が核心として位置づけられている。このように捉えられる DeSeCo キー・コンピテンシーは，すべての個人にとって重要であり，特定の産業や職業，社会階層でのみ役立つようなコンピテンシーは重視されるのでなく，誰もがその発達と維持を切望するような横断的コンピテンシーが重要視されるのである（D・S.・ライチェン，R・H・サルガニク，2012)。

このような DeSeCo キー・コンピテンシーを両義性の視点から批判的に捉えているのは松下（2007）と岩川（2005）である。松下は，DeSeCo キー・コンピテンシー概念を「総花的で理想主義ではあるが，理念的には，現在における一つの到達点を示している」と評価しつつも，コンピテンシーには「両義性」があることに自覚的にならなければならないと言及する（松下，2007，2012)。ここで言うコンピテンシーの「両義性」とは，＜機能的（適応的）－批判的（創造的）＞，＜経済的－政治的・社会的＞，＜労働力－市民＞といった２極の間の葛藤として生じると考えられ，この「両義性」の認識を欠くとリテラシーの一面だけをとらえ，いたずらに理想化したり，逆に，その価値を捉えそこなったりすることになる（松下，2007)。コンピテンシーの「両義性」を捉える意味では，コンピテンシーの中核に位置づく「考える力」と関わってどのような学習内容を位置づけ授業を展開していくかが問われると言えよう。

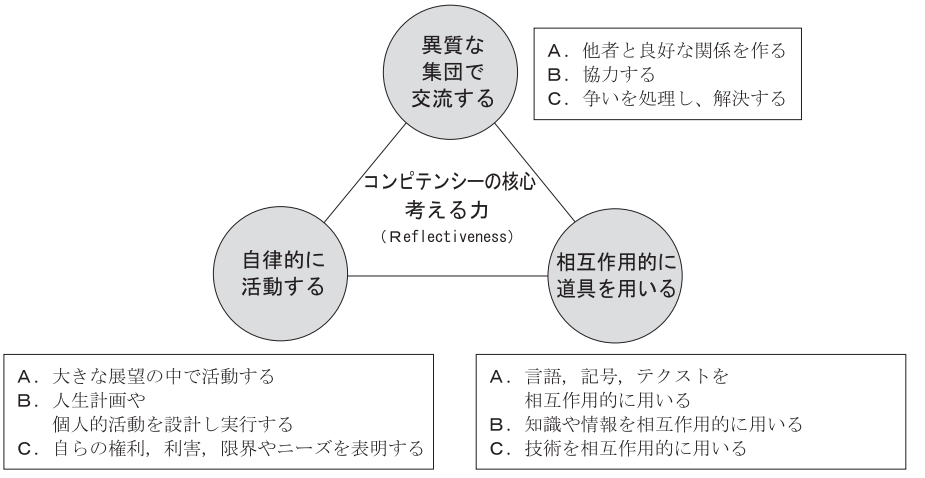

図１　３つのキー・コンピテンシー（立田，2014）

３．中学校学習指導要領における「体育理論」領域

中学校体育科の「体育理論」領域は，表２に示されるように，戦後からこれまで学習指導要領において位置づけられている。学習指導要領における「体育理論」の学習内容は，1998 年の改訂に至るまで改訂を繰り返すごとに質、量ともに減少し，とりわけ運動・スポーツの歴史的・社会科学的な内容は激減し，自然科学的内容がほとんどしめるようになり，技能習熟に関する内容は改訂ごとに強調された（出原，1996，2000；井谷，1997ab；岩田，1998；友添，1998）しかし，近年の PISA の調査結果をはじめ，先進諸国の教育改革などの知識基盤社会を見据え，基礎的な知識と技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等の育成が重視されてくるようになることで，各運動領域に共通する内容に精選された科学的知識を学習する「体育理論」が見直された。体育科教育においては，21 世紀のグローバルな社会構造の中で運動やスポーツの原理や法則だけでなく，それらの社会的意味や文化的意味を理解していくことが求められている（友添，2011）。このような背景から 2008 年改訂の学習指導要領における「体育理論」の学習内容は，大幅に見直された。

中学校の「体育理論」領域の改善点としては，「体育理論」において学ぶ基礎的な知識は，意欲，思考力，運動の技能などの源となるものであり，確実な定着を図ることが重要であることから，各領域に共通する内容や，まとまりで学習することが効果的な内容に精選させるとともに，高等学校への接続を考慮して単元を構成された。また「体育理論」の内容の取扱いは，これまで各学年に必修として位置づいていたが，指導内容をより定着させるために授業時間数を各学年３単位時間以上配当することとなった（文部科学省，2008）。

2008 年中学校学習指導要領における「体育理論」は，学習内容の取扱いが第１・２学年，第３学年と内容が明確にされ，第１・２学年では，「運動やスポーツが社会性の発展に及ぼす効果」，第３学年では，「文化としてのスポーツの意義」として，「現代生活におけるスポーツの文化的意義」「国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な意義や役割」「人々を結び付けるスポーツの文化的な働き」の社会科学的な内容が新たに加えられた。

1947	・体育史　・体育の目的 ・各種運動の解説　・練習方法 ・スポーツマンシップ ・家庭教育　・社会体育 ・国際競技　・余暇の利用 ・運動衛生
1951	・体育史　・体育の目的 ・スポーツマンシップ ・レクリエーション　・家庭教育 ・運動衛生　・国際競技
1958	・運動種目の特性 ・練習の重要性と練習に関する諸条件 ・練習の方法 ・運動生活の設計

1959	・中学校生徒の特性と運動 ・運動の特性と練習 ・運動の効果 ・体力の測定方法と結果の活用 ・現代の生活と運動 ・運動によるレクリエーションの現状
1977	・運動と心身の働き ・運動の練習と体力の測定
1989	・運動と心身の働き ・体力の測定と運動の練習
1999	・運動の特性と学び方 ・体ほぐし・体力の意義と運動の効果
2008	・運動やスポーツの多様 ・運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全 ・文化としてのスポーツの意義

表２　中学校学習指導要領における「体育理論」の内容の推移（井谷，1997a に伊藤が加筆した）

４．DeSeCo キー・コンピテンシーから見る中学校学習指導要領「体育理論」

本項では，中学校学習指導要領解説に示される「体育理論」領域の内容が DeSeCo キー・コンピテンシーの３つのカテゴリーとどのように関係しているか検討したい。とりわけ本研究では，DeSeCo キー・コンピテンシーと密接に関わる OECD の PISA 調査の結果をふまえて改訂された 2008 年学習指導要領を検討対象とした。図２は，DeSeCo キー・コンピテンシーの３つのカテゴリー内容と 2008 年中学校学習指導要領解説保健体育編における「体育理論」領域との内容が関連して読み取れる項目を線で結んだものである。

2008 年中学校学習指導要領において「体育理論」の学習内容は，中学校期における運動やスポーツの合理的な実践や生涯にわたる豊かなスポーツライフを送る上で必要となる運動やスポーツに関する科学的知識等を中心に，「運動やスポーツの多様性」，「運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全」，「文化としてのスポーツの意義」で構成されている（文部科学省，2008）。これらの「体育理論」の学習内容は，運動やスポーツに関する科学的知識のリテラシーとして捉えられることから，図２の「体育理論」の学習内容が，「１．相互作用的に道具を用いる」コンピテンシーのカテゴリーと結ばれる。以下，学習指導要領解説に示される各単元の学習内容と DeSeCo キー・コンピテンシーとの関わりを読み解いていきたい。

第１単元の「運動やスポーツの多様性」の内容は，「体育理論」を学び始めた中学校期の生徒が，運動やスポーツの合理的な実践を通して，楽しさや喜びを味わい，それらを生涯にわたって豊かに実践できるようにするためには，単に運動やスポーツに対して受動的に親しむだけでなく，人はなぜ運動やスポーツを行うのかといった運動やスポーツの必要性を理解したり，ライフステージに応じた運動やスポーツの多様な親しみ方や学び方についてできる必要があると示されている（文部科学省，2008）。具体的な学習内容の解説では，「ア．運動やスポーツの必要性と楽しさ」に

おいて「仲間と交流したり，感情を表現したりするなどの多様な楽しさから生みだされてきたことを理解できるようにする。」，「イ．運動やスポーツへの多様な関わり方」において「地域のスポーツクラブで指導したり，ボランティアとして大会の運営や障がい者の支援を行ったりするなどの『支えること』など，多様な関わり方があることを理解できるようにする。」と示されている（文部科学省，2008）。これらの内容は，DeSeCo キー・コンピテンシー「２．異質集団で交流する」カテゴリーの「A．他人といい関係をつくる」「B．協力する。チームで働く」と関わりがあると読み取ることができる。また，「ウ．運動やスポーツの学び方」において「合理的な練習の目標や計画を立てること，実行した技術や戦術表現がうまくできたかを確認することなどの方法があることを理解できるようにする。」（文部科学省，2008）と示される内容については，DeSeCo キー・コンピテンシーの「３．自律的に活動する」カテゴリーの「B．人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する」と関連させて読み取ることができる。

第２単元の「運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全」の内容については，運動やスポーツの合理的な実践を通して，生涯にわたり豊かに運動やスポーツに親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進を図るためには，その意義や効果，安全に運動やスポーツを行う必要性やその方法について理解できるようにする必要があると示されている（文部科学省，2008）。学習内容の具体的な解説では「イ．運動やスポーツが社会の発達に及ぼす効果」において「ルールやマナーに関する合意を形成することや適切な人間関係を築く」，「人間関係を築くためには，仲間と教え合ったり，相手のよいプレイに賞賛を送ったりすることが期待できる人間関係づくりが必要になることを理解できるようにする。」（文部科学省，2008）と示されている。これらの内容は，DeSeCo キー・コンピテンシーにおける「２．異質集団で交流する」カテゴリーの「A．他人といい関係をつくる」「B．協力する。チームで働く」「C．争いを処理し，解決する」との内容と関連させて読み取ることができる。また，「イ．運動やスポーツが社会性の発展に及ぼす効果」における，「運動やスポーツを行う過程で形成された社会性が日常生活の場でも発揮されることが期待できることを理解できるようにする。」，「ウ．安全な運動やスポーツの行い方」における「発達の段階に応じた強度，時間，頻度に配慮した計画を立案する。」についての解説は，DeSeCo キー・コンピテンシーにおける「３．自律的に活動する」カテゴリーの「B．人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する」カテゴリーと関連させて読み取ることができる。

第３単元の内容となっている「文化としてのスポーツの意義」では，第１学年で学んだ運動やスポーツの多様な見方や考え方，および第２学年で学んだ自分たちの心身の発展に及ぼす運動やスポーツの効果や安全の確保についての学習を踏まえて，スポーツが，人々の生活や人生を豊かにするかけがえのない文化となっていること，また，そのような文化としてのスポーツが世界中に広まっていることによって，現代生活のなかで重要な役割を果たしていることなどについて理解できるようにする必要があると示されている（文部科学省，2008）。学習内容の具体的な解説では「ウ．人々を結び付けるスポーツの文化的な働き」として「民族や国，人種や性，障害の有無，年齢や地域，風土といった違いを超えて人々を結び付ける文化的な働きがあることを理解できる

ようにする（文部科学省，2008)。」と示される内容は，DeSeCo キー・コンピテンシーの「２．異質集団で交流する」カテゴリーの「A．他人といい関係をつくる」「B．協力する。チームで働く」「C．争いを処理し，解決する」と対応させて読み取ることができる。また，「ア．現代生活におけるスポーツの文化的意義」における「現代生活におけるスポーツは，生きがいのある豊かな人生を送るために必要な健やかな心身，豊かな交流や伸びやかな自己開発の機会を提供する重要な文化的意義をもっていることを理解できるようにする。」，「イ．国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割」における，「世界の人々にスポーツのもつ教育的な意義や倫理的な価値を伝えたり，人々の相互理解を深めたりすることで，国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていることを理解できるようにする。」についての内容は，DeSeCo キー・コンピテンシーにおける「３．自律的に活動する」カテゴリーの「A．大きな展望の中で活動する，B．人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する，C．自らの権利，利害，限界やニーズを表明する」と関連させて読み取ることができる。

以上のように DeSeCo キー・コンピテンシーのカテゴリーと 2008 年学習指導要領における「体育理論」の学習内容との関わりを検討すると，学習指導要領の第１・２学年の内容とされている「１．運動やスポーツの多様性」，「２．運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全」においては，「１．相互作用的に道具を用いる」とのつながりの他，「イ」の内容である「イ．運動やスポーツへの多様な関わり方（１．運動やスポーツの多様性)」，「イ．運動やスポーツが社会性の発展に及ぼす効果（２．運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全)」の内容が「２．異質な集団で交流する」と関連し，「ウ」の内容である「ウ．運動やスポーツの学び方（１．運動やスポーツの多様性)」「ウ．安全な運動やスポーツの行い方（２．運動やスポーツが心身の発達に与える効果と安全)」が「３．自律的に活動する」カテゴリーと関連して読み取ることができる。また，第３学年の学習内容とされる「３．文化としてのスポーツの意義」については，「１．相互作用的に道具を用いる」とのつながりの他，「２．異質な集団で交流する」カテゴリーに「ウ．人々を結び付けるスポーツの文化的な働き」とつながり，「３．自律的に活動する」カテゴリーに「ア．現代社会におけるスポーツの文化的意義」，「イ．国際的なスポーツ大会などが果たす文化的な役割」と関連した内容となっている。

このように学年の内容構成とコンピテンシーの位置づけを考えると，第１・２学年では，中学校において初めて「体育理論」を学び始めることから「リテラシー」を中心とした学習内容が位置づけられており，第３学年は，最終学年ということから第１・２学年の学びを積み重ね，自らスポーツ文化の意義を理解し，主体的に「自律的に活動」する学習内容が配置されていると考えられる。また，PISA 調査を意識した改訂であった 2008 年学習指導要領は，「知識基盤社会」への対応ということで「１．相互作用的に道具を用いる」カテゴリーである「リテラシー」に「体育理論」の学習内容が集中して位置づいていると読み取ることができる。わが国では，PISA リテラシーを「PISA 型学力」として積極的に摂取しようとする一方で，他のキー・コンピテンシーについてほとんど注目されていない問題が指摘されている（松下，2007)。つまり，「体育理論」領域

の学習内容においても，キー・コンピテンシーの「２．異質な集団で交流する」，「３．自律的に活動する」カテゴリーの内容は，「１．相互作用的に道具を用いる」とされる「リテラシー」と対等な関係で位置づけられておらず，学習方法としての課題や副次的な価値として捉えられると考えられる。中学校における体育科の学びとして，運動やスポーツ文化を総合的に理解し，問題解決に取り組むスポーツリテラシーを身につけるならば，「考える力（reflectiveness）」を核心にし，３つのコンピテンシーを統合的に視野に入れた学習内容が求められる。そのためには，単元の学習内容だけでなく，キー・コンピテンシーの両義性を捉えておく必要があろう。このことに関わっては，発達段階に応じた各学年の「体育理論」の学習内容ならびにコンピテンシーの重きの置き方についても十分に検討する必要がある。実際の「体育理論」の授業は，学習指導要領を視野に入れた単元構造や内容を理解し，そのイメージを具体的にして実践される。教師は，特定のコンピテンシーを学習内容として位置づけるのではなく，３つのコンピテンシーを統合的に視野に入れ，授業することが求められると言えよう。

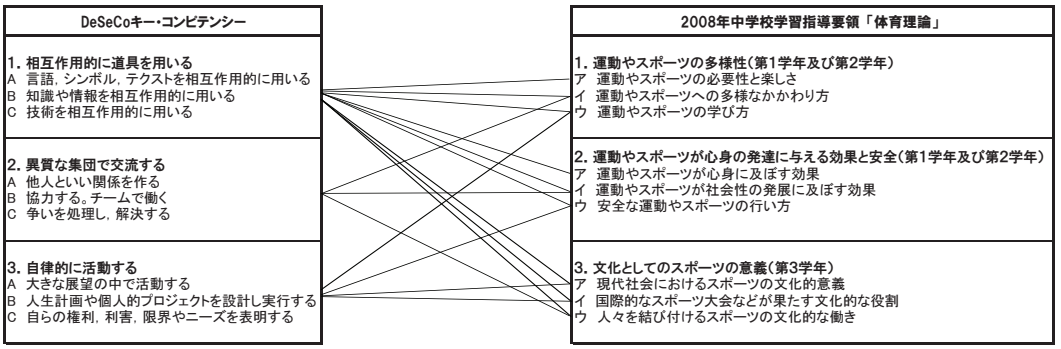

図２　DeSeCo キー・コンピテンシーと 2008 年中学校学習指導要領における「体育理論」の学習内容

５．中学校「体育理論」におけるキー・コンピテンシーの研究課題

本研究は，中学校体育におけるキー・コンピテンシーを捉えるべく，体育科の知識学習の中心に位置づく「体育理論」領域に焦点を絞り，コンピテンシーの世界的潮流の１つとなっている DeSeCo キー・コンピテンシーの視点から 2008 年学習指導要領「体育理論」の学習内容を検討した。その結果として，第一に DeSeCo キー・コンピテンシーは，「考える力（reflectiveness）」を中核として３つの「相互作用的に道具を用いる，異質な集団で交流する，自律的に活動する」コンピテンシーを対等に価値づけ，統合的に捉えることが重要であると確認できた。この「考える力」がコンピテンシーの中核に位置づくには，コンピテンシーおよび学習内容の「両義性」を自覚しながら授業を展開することが求められる。第二に学習指導要領における「体育理論」領域の学習内容の検討では，DeSeCo キー・コンピテンシーに相関性はあるものの，とりわけ「リテラシー」として形成される「相互作用的に道具を用いる」カテゴリーに重きが置かれていると読み取ることができた。我が国において，学習内容のリテラシー部分を積極的に摂取する一方で，他のキー・

コンピテンシーについてはほとんど注目されていないことから（松下，2007），「体育理論」領域においても３つのコンピテンシーを発達段階に応じて位置づけ，各学年の学習内容を検討する必要があろう。教師が授業を実践するにあたりコンピテンシーならびにリテラシーの「両義性」の視点が欠けてしまうと，「体育理論」の学習は，一面的な学習になると危惧される。このことからキー・コンピテンシーが一面化され別の文脈に移しかえられて教育政策や教育現場に導入されていることに自覚的であることが教師に求められるといえよう（松下，2007）。

本研究は，DeSeCo キー・コンピテンシーの視点から中学校学習指導要領の学習内容を検討したにすぎない。実際教師が「体育理論」の授業を実践するとき，学習指導要領の単元構造を理解し教科書や資料を用いながら具体化させる。つまり，より精緻に「体育理論」におけるキー・コンピテンシーを検討するには，検定教科書，教科書に関わる教師用指導書の内容を検討する必要がある。また，我が国において戦後から学習指導要領とは異なる立場として実践を基盤に研究を積み重ねている学校体育同志会の実践研究を研究対象にする必要もある。学校体育研究同志会は，1955 年の創設当初から体育における認識的側面の重要性を主張し，「学校体育は何を教える教科であるか」と体育の教科構造を問い直しながら積極的に「体育理論」の授業実践に取り組んでいる（井谷，1997a；出原，2000a）。学習指導要領に関わる教科書，教師の指導書の検討とともに，「体育理論」の教育実践・理論から「体育理論」の教科内容構造を検討することで，キー・コンピテンシーを視野に入れた中学校「体育理論」の実践理念モデルを生みだす知見が得られると考えられよう。

〔注〕

1）DeSeCo（「コンピテンシーの定義と選択：その理論的・概念的基礎」プロジェクト」）とは OECD による成人の能力概念を整理し，新たな定義を行おうとするプロジェクトである。特にこのプロジェクトの大きな特徴は，概念定義を教育学だけに狭く特定した学者や一部の国が恣意的に行うのではなく，学際的な領域の専門家と OECD に加盟する 12 の参加国の政策担当者との協同によって進められ，多くの加盟国や OECD 以外の国，教育の分野だけでなく，経済や政治，福祉を含めた広い範囲での生活領域に役立つ概念を提供した。その研究の成果として特に重要な鍵となる力がキー・コンピテンシーと呼ばれている（立田，2012）。

2）本研究の対象とする「体育理論」とは，中学校・高等学校における体育科目の領域のことを指す。中学校学習指導要領においては，「体育理論」の領域名称は，1958 年から 1998 年まで「体育に関する知識」として示されてきたが，2008 年の改訂より高等学校の内容との接続をふまえ「体育理論」として名称が統一された。

〔文献〕

・ドミニク・S.・ライチェン，ローラ・H・サルガニク，立田慶裕監訳（2012）キー・コンピテンシー―国際標準の学力をめざして，明石書店
・出原泰明編（2000a）教室でする体育―「体育理論」の授業づくり―「小学校編」，創文企画
・出原泰明編（2000b）教室でする体育―「体育理論」の授業づくり―「中学校編」，創文企画
・井谷恵子（1997a）体育理論の授業，中村敏雄編，戦後体育実践論第２巻独自性の追究，創文企画：329-349
・井谷恵子（1997b）認識学習，竹田清彦ら編、体育科教育学の探求―体育授業づくりの基礎理論，大修館書店：120-135
・岩川直樹（2005）教育における「力」の脱構築―＜自己実現＞から＜応答可能性＞へ，久富義之・田中孝彦編著，希望をつむぐ学力（未来への学力と日本の教育）１，明石書店：220-247
・岩田靖（1998）体育理論的学習の内容と方法を検討する，学校体育，第 51 巻９号日本体育社、pp.33-36

・国立教育政策研究所ＨＰ（https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-lnk1.html）
2014 年 12 月２日アクセス
・国立教育政策研究所（2013）教育課程の編成に関する基礎的研究報告書５社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理（改訂版），国立教育政策研究所
・文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説保健体育編，東山書房
・文部科学省（2014）育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会―論点整理―
（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1）
2014 年 12 月２日アクセス
・松下佳代（2007）数学リテラシーと授業改善―PISA リテラシーの変容とその再文脈化―，日本教育学会編，教育方法 36 リテラシーと授業改善―PISA を契機とした現代リテラシー教育の探求―，図書文化社：52-65
・松下佳代（2011）〈新しい能力〉概念と教育―その背景と系譜，松下佳代編著，〈新しい能力〉は教育を変えるか―学力・リテラシー・コンピテンシー―，ミネルヴァ書房：1-42
・佐藤豊，友添秀則（2011）楽しい体育理論の授業をつくろう，大修館書店
・立田慶裕（2014）キー・コンピテンシーの実践学び続ける教師のために，明石書店

（本研究は JSPS 科研費 26750253 の助成を受けたものです。）